

# ピンダロスにおける thymos, phren, noos

中津海 理恵

## 1 序

古代ギリシヤにおいて人間や神々の精神、心を表す言葉は、*thymos*, *phren*, *noos*, *kardia*, *etor* 等である。しかし、これらの言葉は、一様にまったく同じ意味で述べられているのであろうか。人間の心は様々な機能から成り立っている。むしろ、心の様々な機能を厳密に区別することは難しい。しかしながら、これらの各々の言葉の持つ意味の傾向を探り、その関係を見ることによって、人間の心の構造を垣間見ることが出来るのではないかと思われる。

これらの言葉は、ホメーロスと後の人々とは徐々に使い方が異なってきた。このことは、これらの各々の言葉についての研究によって明らかにされてきた<sup>(1)</sup>。では、これらの言葉が持つ心の作用は、個人の中でどのように関わり合っているのだろうか。この論文では、叙情詩人、ピンダロスを取り上げ、そこに見られる人間の心の構造を探ってみようとするものである。

先にあげた精神、心を表す言葉の中でピンダロスに主に使われているのは、*thymos*, *phren*, *noos* である。この三つに対して、

他の言葉は非常に少ない。そこで、ここではこれらの三つの言葉を中心として進めていきたい。

## 2 thymos

まず始めに *thymos* の特徴を考察してみたい。ピンダロスの勝利歌において、*thymos* は、主に喜び、悲しみと関わる場面に現れる。<sup>(2)</sup>人間や神々は、自分の中の *thymos* で喜び、<sup>(3)</sup>又悲しむ<sup>(4)</sup>。そして又 *thymos* は、外部からの刺激によって、喜ばせられ<sup>(5)</sup>、悲しませられる。又 *thymos* は、愛するものでも愛される<sup>(6)</sup>。喜び、悲しみ、愛は、私達が何かを見たり聞いたりした時に感じるものであり、情緒的なものである。*thymos* は、このような精神的なものを感じる場所である。すなわち、人間や神々の心の働きの一つである感情的なものは *thymos* において生じるのだと考えられる。

さらに *thymos* は、この場所で感情が生じるというだけでなく、しばしば、怒り、嫉妬等感情そのものを表現する言葉としても使われている。感情を生じさせる働きを持つ *thymos* は、又時には感情そのものとしても考えられるのである。たとえば、一

ラクレス誕生の神話において、アルクメーネーがゼウスの息子

なるヘーラクレスを生んだ時、ゼウスの妻、ヘーラーは、怒り、嫉妬し彼を殺すために蛇を送りこんだ。この時の状況は、次のように述べられている。

だが、神々の女王（ヘーラー）は、thymos のために即座に蛇を送ったのである。（*Nem.* 1.40）

この thymos は、感情が生じる場所ではなく、明らかに怒り、もしくは嫉妬という感情そのものを表現するものである。又、他人の成功や普れ等の噂話を苦しみられる thymos<sup>(8)</sup>も同様に嫉妬を表わしていると考えられる。

このように thymos は、外部から刺激をれ何かを感じる働きをするものであり、又その感情そのものでもある。もちろん感情には、好ましい感情と好ましくない感情がある。しかし、thymos 自身はこれを判断することはない。ピンダロスは、これを受けとめ、判断する働きとして他のものを考えていたのではないかと予測される。

さらに thymos の特徴として、thymos は、これを持つ人間を駆り立て、導くというところもあげられる。たとえば、ヘーラクレスが太陽にさらされた不毛のオリュムピア競技場を見た時、ヘーラクレスの thymos は、彼を駆り立てたのである。

その時 thymos はイストリアの地へ彼を運ぶようにと駆り立てた。（*Ol.* 3.25）

ピンダロスも自分の thymos に駆り立てられる。

ともかく、thymos が私を駆り立てるのだ。名声がエム

メニダイにそしてテーローンのためにやってきたことを語るようにと。馬を喜ぶテュンダレオスの息子が彼にその名譽を与えたのだが。（*Ol.* 3.38-39）

そして又ピンダロスは、thymos に自分を導くように呼びかけろ。

さあ、的に向けて矢を放て。thymos よ、導くのだ。私たちは、良き名声の矢を放つため、親切な phien から今度はいったい誰を撃とうというのか。（*Ol.* 2.88-90）<sup>(9)</sup>

このように thymos は、その人間を駆り立て、人間は、thymos に導くようにと呼び掛ける。このように人間が自分の thymos と語り合うためには、thymos とは異なった何かが心の機能として人間の中になければならない。すなわち感情は、人間の心の働きの全てではないと考えられるであろう。そこには感情を生む働きをもつ thymos と導かれることが出来るような人間の主体となるものが必要となる。ピンダロスは、なにを人間の主体として考えていたのであろうか。

さらに又ピンダロスは、しばしば競技や戦いの場面における「勇者 thymos」を語っている。<sup>(10)</sup>

しかし、アムピラーオスのために、全てを支配する稲妻でゼウスは、胸深い大地を切り裂いた。そして、彼を馬と共に葬った。ヘリクリュメノスの槍で背中を打たれて勇者の thymos を不名誉なものにするよりも前だ。（*Nem.* 9.24-27）<sup>(11)</sup>

thymos 自身は、必ずしも勇敢なものではない。「勇気のない thymos」もある。(13)「thymos に偉大な武勇を得ようとする男」もいる。しかし、勇者とは、目的に向かつて恐れることなく立ち向かっていく者である。「勇者の thymos」は、恐れるものであつてはならない。しかし、考察してきたように、thymos は感じるものである。恐れないということは、外からの刺激を何も受けないうことである。もし thymos が恐れなかったのなら、thymos は働かなかつたことになる。恐れないということは、thymos が関与していないことである。しかし、それでは「勇者の thymos」は、不必要なものとなつてしまふ。

勇敢さとの関係で thymos が働く時には、thymos は恐れるのである。そして、勇者は、たとえ thymos が恐れたとしても、あえて立ち向かつていかなければならない。すなわち勇者には、thymos が恐れたとしても、あえてそれに向かわせる何かがあればならぬのである。勇者の恐れない thymos とはどのようなものをいふのであろうか。そして又「勇気のない thymos」とは何であらうか。勇敢さとは、thymos とどのような関係があるのだろうか。このことは、勇敢さがどのような心の働きによつて生じてくるのかを考察することによつて明らかになると思われる。このような観点から、thymos と phren, noos との関係を探つてみたい。

α phren

phren は、今ここで検討しようとしている三つの言葉のうち

で最も頻繁に使われている。2章で見たように、ピンダロスは、thymos に「導くのだ。私たちは、親切な phren から今度はいつたい誰を撃とうというのか。」と呼び掛けている。(14) この phren は、詩心を表現するものと考えられている。このピンダロスの thymos への呼び掛けは、自分に詩を創らせるようにと thymos に促しているのである。ピンダロスは、しばしば詩心を表すのに phren を使う。phren は、詩が生まれてくるところである。ピンダロスは語っている。

私は、メリアーの不死なる寝椅子の傍らで、何か神的力量によつて仕上げたのだ。あなたの恩恵に報いるために、フルー トと phren の技で高貴な旋律を構成して。(Pae. 9. 37) (15)

ピンダロスが、phren の技、すなわち詩作を非常に知的な事と考へていたことはよく知られるところである。「phren の知性」がある。phren から生まれるのは詩のみではない。普通の言葉も又「phren の奥底より引き出される」(16)ものである。そして又、phren は学ぶことも出来る。さらに、ピンダロスは次のようにも語っている。

先のことを見越すことの出来る生まれつきの力を持つ者にとつては、その力は行為することによつて明らかになり、phren は思慮することによつて明らかになるのである。(Nem. 1. 26-28)

これは、ネメアの競技で優勝したクロミウスに対して語つたものである。ピンダロスは、クロミウスが彼の力と phren を人々に

知らしめたことを讀んでいるのである。ここで彼の力を公に知らしめる行為とは、競技場で競い合うことである。その人間が持っている力は、競技で優勝することで他の人々に認められるものとなり、同様にその人の phren は、思慮によって他の人々に認められることになる。すなわち優れた思慮が他の人々に認められたならば、その原因はその人の phren にあるのである。このように詩作や言葉そして思慮と関わる phren は、感情的なものに深く関わる thymos と比べると非常に知的なものであることが認められる。(19)

しかし phren は、このように知的なものでありながら、しばしば、悲しみによってかき乱され、怒りによって惑わせられる。(21)そして又 phren は、愛のために狂わされ、苦しめられるのである。(22)又「死すべきものの phren を妬嫉深い期待が取り囲む」こともある。2章において認められたように、悲しみ、怒り、愛そして妬嫉は、thymos によって表現される感情である。そして、このような thymos によって刺激され、一旦 phren が乱されると、その人間も神々も誤りを犯してしまうのである。(24)自分の phren を乱されながら、なおも確固をしていられる者はいない。すなわち phren の乱れは、その人間(又は神)の混乱となる。そしてその時、人間は、thymos の感じたとおりに行動してしまふのである。

しかし、全ての phren が thymos によってかき乱されるわけではない。thymos の刺激に対して、乱されずに確固としてい

られる phren もある。次のような記述がある。

そして、ペーレウスは、かつて、アマゾンどもの青銅の弓と戦おうと彼に従った。けっして、人をおとなしくさせてしまふ恐れが、最良の phren をしりごみさせてしまふことはなかった。(Mem. 3. 38-3)

恐れも thymos として考えられる。しかし、ペーレウスの最良の phren は、恐れによってかき乱されてはいない。さらに次のように、優れた phren は、thymos が不正なことで喜ばないように配慮することも出来るのである。

しかし、ラダマンテュスは、幸福の鳥へと赴いた。なぜなら彼は、phren の非の打ちどころのない果実を与えられており、悪いたくらみで thymos を奥底から楽しませることもないのだから。(Pyth. 2. 73-74)

このように phren は常に thymos と一体となっているわけではない。thymos によってその人の phren が乱されれば、その人間は混乱してしまう。しかし、phren が thymos の刺激に対して確固としていたならば、その人間は混乱することもないし、過ちを犯すこともない。すなわち、その人の phren の在り方によっては、人間は thymos の感じたとおりに行動するとは限らないのである。

このように、phren はその人間の行動に決定的な役割をもつ。それ故に「もし人間が「phren において果てしない傲慢さを制御するならば、その人は町の人々の賞賛を受ける」であろう。(25)

しかし、「道を外れた phren は、永遠に繁栄と出会うことはない」のである。又 phren は、thymos のようにその人間を駆り立てることもないし、人間も phren に導くようにと呼び掛けることもない。phren は、人間の中に場所を占めており、その人間の性質を決定的にする。phren は、その人間の主体となるものと考えることができむであらう。

もぎめた thymos による刺激がかならずしも悪いものであるとは限りない。ピンドロスは、thymos に時宜になつて人を愛するようだと語つてゐる。愛は、時には phren を狂わしてしまふ。しかし、時宜になつてゐるならば、phren が愛に刺激されることはよいことなのである。それ故に人は、望ましいことについて、自分を導くようだと thymos に促すのであらう。同様に、ピンドロスの thymos が、トロンの勝利に感じ入り、phren を刺激することも、ピンドロスにとっては望ましいことである。それ故に、ピンドロスも又 phren を刺激するようだと thymos に呼び掛けるのである。

ではここで、phren と勇氣との関係を見てみたい。ペーレウス(26)の phren は、恐れに乱されることはなかつた。そして又 phren は、thymos が悪く働かないように配慮することが出来る。さらに、ピンドロスは次のようにも述べている。

「この人も、低くかまえた四〇人の御者の中で、汝は、恐れを知らぬ phren によつて、無傷の馬車を駆つて、今、輝かしい競技場から祖先の町なるリビアの平地へと到つたの

だ。(Panh. 5. 49-53)

先に見たように、phren は知的なものである。そして、phren の中でも最良のものは、恐れによつて脅かされることはないのである。phren の知性は、恐れを寄せ付けないことも出来る。それは、「恐れを知らぬ phren」である。「勇者の thymos」とはこのような phren によく配慮された thymos なのではないだろうか。すなわち勇者の phren は、thymos が恐れることのないように配慮してゐるのである。それ故に phren の在り方によつては、「勇氣のなす thymos」も生じる。そして、phren の知性による配慮を thymos に效してしよつとする男は、「thymos に武勇を得よう」としてゐる者なのであらう。それ故に、「勇者テリオンの phren は次のように讃えられる。

しかし、テリオンよ、運命の女神は、汝に最高の幸せを  
与えたのだ。汝が素晴らしい勇氣を示したのだから、女神が  
汝の phren の知性を破滅させることはないであらう。(Nem.  
7. 58-60)

すなわち、人々に勇氣を示すことが出来るテリオンの phren は、非常に優れた phren である。運命の女神がこの優れた phren をいつまでも見守るのであらうと、ピンドロスは語つてゐるのである。

又ピンドロスは、しばしば人間の phren の限界について述べている。すなわち人間の限界である。  
私達は、神々から死すべきものの phren にぞちわし、

ものを求めなければならぬ。足元にあるものを知って、どのような運命にあるかを知って。(Psal. 3. 59-60)<sup>(30)</sup>

thymos については、人間の thymos であるがゆえの限界というものはない。人間も神々も様々な感情をもっている。しかし、その人の本質として見られる phren には、おのずと人間であれば、人間であるがゆえの限界が生じるのであろう。

#### 4 noos<sup>(31)</sup>

では、noos について考察してみたい。ピンダロスによると、アポロンは「あらゆることに精通している noos」を持っている。そのため彼は、「行為によっても策略によっても神にも人間にもだまされることがない」のである。すなわちアポロンは、noos によって嘘か誠かを知る。このように真実を見極める機能をもつ noos は、洞察力として考えることが出来る。

さらに又 noos は、真実を見極めるだけでなく、その中の正義と不正を見極めるといふ道徳的な判断力ともなる。ピンダロスは語っている。

地上の人間の種族のものは、正義と曲がった策略とどちらによってより高い塔へ登るのか。私にとつては、noos がこのことについて区別して正しいことを語るのである。

(Fr. 201)

このように noos は、正義と不正を区別し、さらに正しいことを判断する。このように道徳的な判断を可能にする noos は、又正

義そのものとしても述べられている。

彼は、不正や傲慢さではなく、noos によって富を管理した。若さを楽しみながら、又ビーエリデスの聖地で詩作を楽しみながら。(Psal. 6. 47-49)

ここで見られる noos は、不正や傲慢さに対応する正しい心、正義であると考えられる。人間は、アポロン神のように「あらゆることに精通している」ような完璧な noos を持つことは出来ないであろう。人間の noos は、自分がどのような運命にあるのか知ることは出来ない。<sup>(32)</sup> 先のことがわからない人間にとつて、その瞬間に正しい事とそうでないことを正確に判断することは困難であろう。しかし、ピンダロスは語っている。

それでもなお、私たちは、偉大な noos か、あるいは本性において不死なるものに似ているのである。(Nem. 6. 4-5)

真実を見極め、そして道徳的判断を可能にする人間の noos は、神に似たものと考えられているのである。そして、もし人間が「noos に真実の道を得たならば」、その人は「神から幸運を受け取った者」<sup>(34)</sup>なのである。もちろん、あらゆる noos が優れているわけではない。「人は生まれながらの栄光を持たない人は、[その不甲斐ない noos で数知れない武勇を試してみるのである]」<sup>(35)</sup>すなわち特別に神から望まれた人以外の noos は、よく真実を見極め、正義と不正を判断することは出来ないのである。

では noos と phren は、どのように関わり合っているのだろ

うか。noos について次のような記述がある。

彼は、その年齢よりも遅しい、noos と舌を育てる。

(*Pyth.* 5. 109-111)

ここで noos と並べられている舌は、口から発せられる言葉を言い表しているものである。3章で見たように、phren も言葉と関わるものであった。「言葉は、phren の奥底から引き出されるもの」である。しかし、phren で生れた言葉は、かならずしも口から発せられる言葉ではない。もちろん、「彼の舌がその phren からはずれることのない」ということもある。しかし又、「彼の口は phren で望んだことを語らない」ことも出来るのである。

確かに、人間は考えたことを全て語ってしまうことはない。言わずに済ませることもある。phren の奥底から生まれてくる言葉から適当なものを選び、語ったり、語らなかつたりするためには、その場の状況を見極める判断力が必要となる。考察してきたように、物事を見極める判断力は noos の力である。<sup>(38)</sup>口から発せられる言葉は、主に noos に関わっていると言うことができるであろう。

又ピンダロスは、キューレーネーの王、アルケシラースを讃えて述べている。

汝は偉大な国の王である。汝の生まれながらの洞察力は、

汝の phren と一つになって、最高に讃えられた誉れとしてこのことを守り続けているのである。( *Pyth.* 5. 15-19 )

アルケシラースの phren は、生まれつき与えられた洞察力と一

つになってキューレーネーの王の地位を守っている。洞察力は、noos の力として考えられるものである。phren で生まれた言葉は、noos の判断によつては表に現れないものであった。同様に、優れた人間の phren も noos の判断がなければ行動に結び付かない。優れた人間の phren は、生まれつき与えられている優れた noos と一つになることによつてこれを公に示すことが出来るのであろう。すなわち、noos は、phren で生まれてくるものを判断し、適切な形で表に表わすものなのである。

では noos は、thymos の働きとどのように関わっているのであろうか。もし、あらゆる noos が phren で生じる事柄を善悪の観点で正しく判断できるならば、thymos によつて乱された phren は、正しい noos の働きで過ちを犯さずにすむのかもしれない。しかし先に見たように、「不甲斐ない noos」もある。そして、「愛で高揚する noos」<sup>(39)</sup>、「嫉妬の noos」<sup>(40)</sup>もある。愛、嫉妬は thymos に掃されるものである。noos も又、thymos によつてその判断を乱されるのである。

phren は、その人間の主体となるものである。そして、phren は thymos によつてかき乱される。そして phren が乱された時には、その phren に基づいてその状況を見極め、その善悪を判断する noos も又、その判断力を乱されるのだと思われる。「不甲斐ない noos」を持つ者はなおさらであらう。すなわち、その人間の行動の本質は、その人間の phren に係っている。そして、状況を見極め、善悪を判断するという神にも似た力をもつ noos も、

その phren の本質的な在り方を越えることは出来ないのである。ではこのような noos は、勇敢さなどのように関わっているのであろうか。noos と勇敢さについて、ピンダロスは次のように語っている。

私は、又、競技者の中でピュティアースを讃える。彼がピュラキダースによる打撃のコースを真つすぐに押し進めたということを讃えるのだ。彼は、手において機敏であり、noos において勇敢であつた。(Isth. 5. 59-61)

ピュティアースの手は機敏に動いた。同様に、彼の noos は機敏にその状況を見極めたと考えられる。勇敢さには、その一瞬の状況を見極めることも判断力も必要である。又そこには、今ここでそれを為すべきか否かの善悪の判断も伴うと思われる。noos の勇敢さとは、戦いの場面においてその状況を正しく見極めることであろう。優れた noos は、この判断力を学ぶことが出来る。

パトロクロスの noos が武勇を学んだということを、思慮ある人々に示したように。(Ol. 9. 74-75)

noos は武勇を学ぶ。しかし、「不甲斐なき noos」は「教知れない武勇を試みるのである」。

以上のように、勇敢さとは、外部から刺激をうける thymos とその thymos によつて刺激されるものであり、又その thymos に配慮を与えらるゝものである phren と phren を基つて瞬間的なそして道德的な判断力を下す noos とがその三つの機能によつて生じるものである。ただし、このうちのどれかが劣つていたらなら

ば、勇敢さは生まれぬ。すなわち勇敢さとは、優れた thymos と優れた phren と優れた noos によつて生じてくる。ピンダロスにとつて、勇敢ある人とはこの条件を満たしているものなのである。そして又、ピンダロス自身の詩も優れたこの三つの機能によつて完成するものなのである。ピンダロスは、パトロンが優勝した姿に thymos を刺激される。そして、thymos に呼び掛ける。私に、すなわち phren が詩を生みだすようにと。ピンダロスにとつて、詩作は、彼の本質的なものである。ピンダロスそのものである。そして、phren から生みだされた詩は、noos によつて完成されるのである。

さて、ドーリア人のリュラを掛けくぎから取りなさい。もし、ピサとヘレニオスの栄光が、お前に最も甘美な思考へと noos を働かせるならば。(Ol. 1. 17-19)

私達は、ピンダロスにおいて人間の心のこのような働きを見ること出来るのである。

### 注

- (一) ホメロスとそれ以降の人々の thymos, phren, noos についての論文は Hermann Fränkel, *Man's Ephemeros Nature According to Pindar and Others*, *T. A. P. A.*, 77 (1946) pp. 131-145; J. Furley, *The Early History of the Concept of Soul*, *B. I. C. S.*, 3, (1956) pp. 1-18; J. Russo and B. Simon, *Homeric Psychology and the Oral Epic Tradition*, *J. H. I.*, 29 (1968) pp.





と云ふは phren は、恐れや勇氣と直接関わつてゐる  
と云ふ指摘してゐる。

- (20) *Pyth.* 6.36.  
(21) *Ol.* 7.30.  
(22) *Pyth.* 2.26. *Pyth.* 10.60.  
(23) *Isth.* 2.43.  
(24) *Ol.* 7.30. *Pyth.* 2.26. *Ol.* 1.41, *Pyth.* 4.109.  
(25) *Isth.* 3.2.  
(26) *Isth.* 3.5.  
(27) *Pae.* 4.45. と云ふは、ソングは自分の phren と「  
お行ひなす」と呼び掛けてゐる。しかし、自分を導いて  
おのづかはなす。  
(28) S. M. Darcus, *Glossa*, 57, pp. 169-173. とは「愛  
打を負かされた phren」等をあげ、ソングは  
phren は「人間と心理的機能との対立を示唆してゐる」と指  
摘してゐる。しかし、人間は phren に逆らふことを行  
動するのだから人間と心理的機能との対立とは、考えてく  
る。
- (29) *fr.* 108.1, *fr.* 112.4.  
(30) 他 *Pyth.* 4.139, *Ol.* 8.61, *Ol.* 8.24, *fr.* 50.4. と云ふ  
は人間の phren 限界をこへるとの記述が見られる。  
(31) ホメロスにおいて、noos は洞察力であり、やがて思  
考の道筋、知となつたといふ指摘が多い。B. スネル、前  
掲訳書、pp. 32-35; J. Furley, art. cit., pp. 6-8; S.  
M. Darcus, *L'antiquité Classique*, 46 (1977) pp. 41-51.  
しかし、ホメロスのと云ふ noos は洞察力そのもの意志  
計画を表してゐるといふ指摘もある。K. von Fritz, 1902

and *NOELI* The Homeric Poems, C. P. 38 (1943) pp.  
79-93.

- (32) *Pyth.* 9.27-30.  
(33) *Nem.* 6.6-7. 又 Hermann Fränkel, art. cit., pp. 131-  
141 は「人間の心は運命によつて良くも悪くも直ぐに変わ  
る。人間の noos は、この変わりやすい運命を知ること  
出来なからうと云ふことを指摘してゐる。」  
(34) *Pyth.* 3.103-104.  
(35) *Nem.* 3.40-43.  
(36) *Isth.* 6.72.  
(37) *Nem.* 10.29.  
(38) 上の二は、S. M. Darcus, *L'antiquité Classique*, 46  
(1977) pp. 41-51. を指摘してゐる。phren の言葉は、  
noos よりも深い所から出る真実の叫びであり、noos は、  
それを最良に表現する。ならんアオニスに於いては、noos は  
hymnos の運動をコントロールするといふ指摘もある。  
(39) *Ol.* 10.87.  
(40) *Pyth.* 2.89.

トキムトは、C. M. Bowra, *Pindari Carmina*, Oxford,  
1935, rep. 1968 を使用した。

(東海大学大学院文学研究科研究生)